

## ◎県外避難者支援

- ・ 明舞団地の現状 「神戸まちづくり研究所」の東末真紀さん

研究所が明舞団地の団地再生に関わっている関係で、明舞団地に受け入れた県内避難者の支援をしている。家電を含めた生活物資や、情報を提供を、CS神戸と神戸西助け合いネットワークと連携しながら進めている。

家電提供した人も多かったが、連休前には「神戸はどういう町」「どんな幼稚園が良い」という生活情報の問い合わせが多く、あらゆるところに問い合わせながらつないでいる。

明舞団地に入った人は周辺を含めて4世帯。まちづくり広場を拠点にNPO、自治体と連携して見守り活動をしていけると思う。市営の入居者を回る保健師に活動を紹介するチラシを配ってもらっている。だが、北区など明舞から離れた人への支援は、まだ動けていない。

避難者のつながりを作るイベントを5月22日にしようとしているので、きっかけにつながり直して見守り活動をしていけたらと思う。

神戸市、団地再生の県の担当部局とも連携しているが、情報提供がダブっている状態で、取りまとめる必要がある。

東播磨地域の入居者が増える予測があり、市や県とのパイプがないところが、どう被災者とつながるかが課題。シーズ加古川と連携しながら、つながりがつくりたい。

- ・ シーズ加古川の田中茂さん

「被災地を応援する加古川市民ネットワーク」を立ち上げた。避難所に千羽鶴がほしいという声が上がったので、加古川でみんなで折って、次に行ったときに持って行く予定。

4月の中旬に現地に行き、岩手でカウンターパートを見つけようと、調査をやってきた。「SAVE IWATE」と連携することを模索中。今からは、義援金より支援金を集めようとしている。

物資はニーズが現地で細かくなっているが、フリーヘルプというホームレスの支援をしている団体が、仕分けを手伝ってくれる。ニーズを発掘しながら、物資を現地に送り始めている。昨日、一昨日とSAVE IWATEに持って行った。

県が避難者を受け入れる11団地のうち、7つが東播磨地域に集中しているので、ニーズが増えてくる。CS神戸の様な活動を、加古川でする準備を始めている。県にチラシを配ってもらうお願いはできておらず、加古川に転入は親戚を頼る人だけのようなので、活動はこれから。現地の情報を加古川で、加古川の情報を現地へ一とつなぐメーリングリストができて、活発に現地入りしたメンバーなどとのやりとりが始まった。

また、連休の後半から日曜に掛けて、KECと一緒に岩手から福島へ行った。再度、西部岩手に行って、「遠野まごころネット」との調整、岩手県立大の山本先生との打ち合わせもして、岩手に重心を置いて、岩手北中部への支援をしていけたらと、ヒアリングをしている。

- ・ NPO法人 ワーク・ライフ・コンサルタント藤嶋一篤さん

旧・淡路高校一宮校を活用した一時遠隔避難所の内覧会に行った。詳しくはホームページのブログを検索を。避難所の様相で、32部屋間仕切りがされていて、調理スペース、食堂、理科室を使った勉強部屋がある。診療を受けられるスペースがあるが、トイレにはバリアフリーはない。3階建てだが、玄関からバリアフリーではなく、高齢者には厳しい状況か。食事は調理室があり、ごはん、味噌汁、おかずの提供がある。調理台、炊飯器、食器具はある。淡路県民局主管で、避難者は、現在、ゼロ。宮城の兵庫県の拠点を通じて冊子を置いてPRするが、行き渡っていない。

5月24～27日に現地に行き、県外避難のニーズ調査をする予定。県外避難者がまとまって来にくい状況があると思う。津波で一人親家庭になった人で、就業が難しい人がどれくらいあるかを見たいが、宮城の子育て支援課では把握はしていない。震災孤児が65人いて、心を痛めているそうだ。現地については調整中。県外避難のニーズを調査したい。

・ 復興塾 小森星児さん

関西の県外避難者の状況をヒアリングを交えたNHKのラジオ番組に出て、大阪、奈良に来た人の話を聴いたが、関西で驚いたこととして薬局にゴキブリほいほいの箱がいっぱいあることを挙げていた。「エアコンを付けたことがない」「近畿の夏を過ごせるかが問題」・・・と色々聞いた。

阪神大震災で活動した大阪のNPO法人街づくり支援協会が「県外避難者ホットライン」を開設した。原発の避難区域以外から避難した世帯への対応や、府営、市営、その他公的住宅でそれぞれ受け入れ体制に違いがある。掃除もしていない住宅を提供する例もある。入居時に掃除を手伝うのはNPOや自治会で対応できるが、行政が何も情報提供してくれないのが問題。

宝塚NPOセンターは5月14日に第一回の歓迎パーティーを実施する。奈良でも同様の計画がある。

・ 「暮らしサポート隊」の石東直子さん

当面の活動は6月4日に食事、温泉付きの歓迎ピクニックに行く。暮らしサポ隊のパンフレット、ピクニックの案内チラシは神戸市市営、西宮市市営、兵庫県県営住宅入居者には行政から届けてもらえるようになった。メディアに報道されたので、連絡があったが、ほとんどがボランティアをしたいというものだった。7月から、毎月一回「みちのく・談話室」を、三宮ターミナルホテルのラウンジを借り切って開く予定。そこで三味線を弾きたい、尺八を聞いてほしい、絵手紙をしたい等々、ボランティアからの連絡がたくさんあったが、肝心の被災者さんの「ピクニック行く」という連絡はない。行政から発送してもらおう案内チラシは未だ届いていないので。

京都でも暮らしサポート隊が立ち上がりそうです。ネットで暮らしサポート隊を知ったそうで、5月20日に具体的に立ち上げの相談をする。パンフレットを被災地に届けてもらったので、仙台のNPO生活習慣改善センターの理事長からパンフレットに勇気づけられたという電話をもらった。こんなパンフレットがお役にたったなんて、私のほうが感動した。

サバイバルネットワーク 松下さん： 県外避難者はトータルで何人ぐらいですか。

復興塾 小森さん： 連休の前は近畿で2000人。兵庫県が一番多い。兵庫県のトップページで数字が出ています。最初にどっと増えたが、今のところ伸びは低調で、一日数世帯ずつ増えている感じです。

環境緑地設計研究所 辻さん： 奇跡の星の植物館は、2世帯7人来たので、健闘した感じですね。

東末さん:明舞団地の方はやっと落ち着いた感じ。来て、荷物運んで体調崩して、今、ようやく就職しないと、と。「ちょっと話に来たの」とようやく尋ねてくれるようになった。これからかな。

神戸まちづくり研究所理事長 小林郁雄さん: 河北新報、福島民報、岩手民報と3紙を3月11日から3ヶ月間ある。石東さんのサロンなどに運んでいきます。

辻さん: 震災復興記念公園にも来てもらえたらいいな、と段取りを考えている。

関学教授 室崎益輝さん: 県外避難者については全国的に、3万~5万の間。そのうち7割が福島県が外にいる。一番多いのが新潟で9千人。意外に福井が原発つながりで、仕事関係で引き受ける人が多い。新潟でも柏崎が多い。関西は全部足すと、数千という感じで、大阪、京都、兵庫。広島、岡山、沖縄も・・・全国に散らばっている感じです。県外避難のスピードは、頭打ちです。直後に避難した人たちが戻り出している。が、再建ができずに、またこちらに来る人がいるのではないかと見ている。

- ・ CS神戸 飛田敦子さん

生活支援は、3月24日から始め、累計25世帯72人の支援した。電話も、1日、1件、1世帯にこのペースに減った。(資料参照)

支援先は、神戸の西に固まっている。依頼は、原発関係の福島出身が18、宮城4、岩手2、茨城1あった。

鍵渡し時以外にも、保健師の定期訪問があり、神戸市営住宅は、活動を知ってもらって、連絡してもらっている。

冷蔵庫、洗濯機の大型家電が多いが、最近は網戸、自転車など要望が変わってきている。1世帯に1回だけでなく、1週間ぐらいたってからフォローの電話をするとニーズが追加できて、支援世帯数よりも実働は47件と多い。

企業からの問い合わせもあり、神戸西助け合いネットワークに生活物資を保管しているが、住友ゴムも倉庫を提供し、支援金についても検討いただいている。さらに妊婦用のベビーベッドなど集めきれなかったものを集めてもらった。エディオン(ミドリ電化)が大型家電を10セットずつ。P&Gがおむつ、生活用品を提供いただいた。また友利屋から理容券をもらったが利用がない。

芦屋市からも支援依頼があり、芦屋市の県住に住んでいる人のところに、西助け合いネットワークにお連れして、選んでもらうことにした。

物では自転車は個人の方をお願いできたが、網戸が手に入れられない。

## ◎被災地支援

- ・ 神戸まちづくり研究所 野崎隆一さん

4月29~5月4日まで東北3県を回ってきた。阪神・淡路まちづくり支援機構(弁護士会、建築士会、司法書士会、土地家屋調査士など士業団体の連合体)に同行した。阪神・淡路のとき、立ち上げ

に1年7カ月かかったという後悔が、今回の行動につながっている。まちづくり支援機構は東京、神奈川、静岡、近畿にあります。広島、長野、新潟で準備段階できつつある。機構には付属研究会があり、大学の研究者、まちづくりコンサル、それに、今回は原子力の専門家、放射線医療の専門家を加えて行って、各地で相談をした。相談の一番多いのは相続。「権利書が流されたが売買できるか」や、「自分の家の瓦が落ちて、隣の車を傷つけて、直すと約束した。でも、その後、起こったらどうすると言われていた」という隣人とのトラブルなど、いろんな相談を受けた。相談内容は、弁護士がまとめるので、みなさんに触れる形で公開したい。内容はあまり深刻ではないものが多かった。半年、1年後になるともっと深刻な話があると思うので、引き続きやっっていこうと思う。

原発関係の専門家が2人行ったのですが、福島といわきの避難所で相談しました。「心配しなくていい」というメンタルケアに力点を置いて説明していて、そのまま収録していいのか、弁護士が慎重で議論中です。100<sup>3</sup>ミシーベルトまでの被ばくはデータがなく、推測にしか過ぎない。影響があっても0.25%上がる程度なので、2人の学者はとにかく、わからない。低線被ばくは心配しなくていいと言っていました。

その後は、復興塾と合流するために単独で動いた。ある神戸の避難所のリーダーの車で、気仙沼、南三陸町、石巻の辺りを回ってきた。母と妻を亡くしている同期の人間を訪ねた。「扉の下から水が来ているで」と言って母と裏口に行ったら、水位が上がって扉が開かず、振り向いたら玄関が破られて、水位が上がって、畳が浮いて、母は畳の下に入って、水面に出れない状態。水引くまで、本人は欄間につかまっていた。水が引いてから、母を探しても見つからず、3週間後に見つかった。畳って怖いと話していた。

また、県の気仙沼の出先に行った。県では石巻、気仙沼、南三陸町に拠点を置いて支援しているが、毎週交代で行っているのは6月末で締めくくりをしたいという。阪神・淡路を経験した人が役に立つのは、行政マンがいなくなった南三陸町などで、それに特化して支援したいという話だった。桜が満開できれいで、皮肉なコントラストを見てきた気がします。

罹災証明の発行が非常に遅れており、復興の道筋が決められないという悩みが深刻。福島県では、木造在来工法の仮設を4千個建てるという説明を受けた。地元の工務店相手にコンペをしてそのうちの10数社を選んで、県産材を使ってするという。

・ NPO法人しゃらく 小嶋新さん

ゴールデンウィーク中に県が設置した東北道の泉PAボランティアインフォメーションセンターに行ってきた。渋滞情報、できること何かあるか—などという問い合わせをさばく。県社協やNPO5団体が日替わりで入って、連携して運営。地元のボランティア団体が入っていて詳しかった。相談は多く、「関東から行きたいがナビが壊れた」「看護師をやっていた、明日だけ休みがとれた。私にできることは何か」「ボランティア充足していますよね」という質問も。

ボランティアセンターについて受け入れられない状況が続いていたが、実質、すべてのボランティアがずっと充足していた訳ではなく、名前が売れていない場所はオープンだった。NPOが主体のボラセンも幾つもある。遠野はうまくいっているが、気仙沼のボラセンは社協との連携がとれていない・・・など、質がばらばら。ボラセンは5月中旬で終わるという話があったが、実質伸びそうな状況。ニーズを探すと、もっと出てきそう。

室崎さん:インターネットや全国社協がインターネットに出すと伝わっていると思っているが、ホームページの情報は全く役に立たない。ボランティアインフォメーションセンターは、スピード感がある。情報を取る側も、ボランティアする人がどういう思いをもっているかが分かる。非常に残念だが、県が15日に撤退する。いつまでもでしゃばっては行けないという判断と、送り出す方に、相当、力

を入れないといれないという判断だが、完全になくなるのはもったいない。

## ◎復興まちづくり

- ・ 内閣府ボランティア連携室 田村太郎さん

他の方がまだ発言されていない点に着いてのみ、お話しさせていただきます。

ゴールデンウィーク後半からすでに、ボランティアの人数が減りはじめています。ニーズはまだある。旅行会社もいくつかバスツアー出し始めているが、学生の授業が始まったので、夏休みまでは社会人でどうつなぐかが課題。

県外避難者で、新潟、山形、会津などの旅館に二次避難している人へのケアも課題。子どもの遊ぶ場所がないという声や、費用が旅館側が思った以上に掛かっていて負担が重いという声もある。普段は日中は客はいないのに避難者はずっといるので電気代がかかる、スタッフも休めない—ということ。避難所と異なり、旅館は個室なのでケアが必要な人へのアプローチが難しい。仮設住宅への入居など、情報が入らなくなったりするのも課題。

仮設住宅は夏の暑さをどう乗り切るのか、冬をどう乗り切るのかも、今から考えないといけない。大規模仮設住宅団地では談話室や集会所の設置も進んでいるが、50戸未満の仮設住宅団地で整備が追いついていない。経験のある神戸の人たちが「こういう施設や活動が要る」と言っていないといけないと思う。

こちらから被災地に行くことも大切だが、現地のリーダー格の人に神戸に来てもらうことも良いのではないか。神戸というと大きすぎて参考にならないと思うかもしれないが、長田区ぐらいの規模感なら参考になるものも多いと思う。活動から一時的に離れて休憩してもらうことも兼ねて、神戸で2~3日、受け入れることを復興塾として考えて欲しい。

- ・ 野田北部・河合節二さん

我々の地域を撮影した青池監督が石巻の小学校に入るそう。2校ぐらい。行政から手続き踏まないと撮影できないが、現地の人でも賛同を得た。早ければ6月から撮影に入って、学校は1学期間撮って、約1年間という報告が来ている。皆さんに協力を。

石巻の非認定の避難所から、地域をどうするか考えていきたい—という声もある。でも行政の動きが現地の人にもわからない。従前の土地に建てようと思うと、辞めといたほうがいいと言われるそう。住民サイドの支援をしたい。

小林さん:ボランティアが倒れそうだから、呼んであげんと。遠野もずっとやっている。こっちで講演会を企画して、義援金を我々で集めるという事をしてあげるべき。

## ◎被災状況

- ・ 環境緑地設計研究所 辻信一さん

石巻、遠野、釜石を見てきたが、千葉の旭市にも行った。ほとんど報道されていない。

被害規模としてはそんなに大きくない。三陸の大被害に比べると小さいが、旭市で13人が亡くなっている。防潮堤と自転車道、県道があって家がある地域で、第一線の建物が、ほぼ全壊で壊れている。現地に行った5月7日の段階では、すでにガレキはほぼ撤去されて、土が入り、復興の第1段階が始まりつつある状況。被災規模が少ないと復旧復興の立ち上がり早い。

海岸は隆起海岸で、仙台平野のような浜堤の後背地でいったん高度が下がるような地形ではな

いく、海水がたまるようなことはない。壊された、流された家と残った家がランダムにある。新しい建物は比較的残っているようだ。

津波は1.5mから2m程度来たよう。防潮堤に市街地が接しているため、仙台級の波が来ていたら、ひとたまりもなかったと思う。

偶然たどり着いた総合公園のグラウンドに仮設住宅建設地があった。公園内の施設が避難所になってクーラーがついていて、結構立派だった。被災規模と立ち上がりのスピードが分かりやすい。

- ・ 神戸国際大 大津俊雄さん

先月は岩手、今月はみんなと宮城県に行った。(ビデオ上映)

石巻は人口16万で重要港湾で、産業が盛ん。漁業も盛ん。商業は津波でやられるまでもなく、へなへなだった。郊外のショッピングセンターにみんな移って、ニュータウン化するのかなと思う。3千人なくなって3千人不明で、かなりの被害。避難民も1万人いる。各地区で様相がかなり違う。三角形の土地で、南側は港というイメージ。川を水が遡上して、結構やられている。商店街の建物は昭和40～50年の古い物ばかりで立ち直れない。

市長はグラウンドデザインを作って市民に示すと行っていたので、復興塾の考えを提案した。漁業者は6千トンの冷蔵庫をほって、8億円の損だと言っていた。技術移転で他の市と連携して立ち直りを待つしかない—と。石巻専修大学との連携も学校自体の存続が難しくなり、できそうにない。ボランティアは元気だが、市域が広くて、何からやっていったらいいか。石ノ森章太郎の出身地で萬画館が無事で、それを核に・・・と思っても、割と市民は引いているみたい。

女川町は人口は少ないが、津波の水が暴れ回った。地形が鳥のくちばしのように上がっていて、地形が複雑で、波が変に来た。海岸近くの多くの鉄筋の建物が、返って、水の勢いを増大したようだ。高い所に海水が駆け上がっていった。狭いところを駆け上がった波もあった。でも普通の波はもっと重くて、中心部を引っかき回したという感じ。

岩手県はリアス式海岸。宮城県は九十九里浜みたいな海岸が続いている。建築と地震の関係は神戸の経験で分かったと思うが、津波は全然わかっていない。うずまく津波はとても重く、自動車や柱はぼこぼこ。大船渡の職員が遺体を探しにいったら、頭だと思ったら、心臓だったというぐらいの損傷。手、足がついているのはないと。それだけ渦の中でもまれてしまう訳です。

津波をみると、黒い線があるが、最初の波は、海の波だから真っ白で、もっと高い。S8年に来た津波と、今回は同じ高さまでできていると思われる。被害が増大しているのは、道路、防波堤を作ったので安心して、田畑を家に変えて住んだところが今回やられた。これは人災だ。80年前だから、忘れるんですね。想定内の人災をたくさん見てきた。

宮城県の九十九里浜型では、波が乗り越えて後ろに5kmまで行く訳ですが、田畑に新住宅の地区ができており、そこがつるんとやられて、土台ばかりで何もない。無理に用途地区の変更をさせたと思う。住宅だけは高台に作らなければいけない。産業はしゃあない。

- ・ 神戸まちづくり研究所理事長小林郁雄さん

(写真紹介しながら)

内陸側も結構地震で壊れている。福島県伊達市に行った。震度6強だと思う。蔵が壊れ、4階建てぐらいの立派なコンクリートが壊れて、木造は崩れていない。屋根瓦の軒は全部ずれている。

須賀川市の市役所は4階建てで、ぼろぼろに壊れていた。隣の体育館は無事で市役所が避難している。建築家が応急危険度判定がされているが、罹災証明を出す際には混乱のもとになる。

三春町は、蔵だらけの町で、そこら中、蔵が崩れている。蔵って壊すのが大変で、公費解体で壊す人が多いので、なんとかしないとイケない—としょうゆ蔵のご主人と、守ろうと話している。

原発の避難地域の人をどうするかという差し迫った問題があります。帰れるかもしれないのに、どうするのか。提案するのは「2地域居住」。新しい土地にも家を作れと言わないと、原発の話は治まらないので、二つ家ができれば、建築士がもうかるし。東京電力に言ったらなんでもあり。

福島県は追加の4千戸の仮設住宅をコンペで出して、公募し、地場の業者が自分で作るようにしている。ほとんど県産材を使った木造。宮城は材木生産が少ないからやっていないが、岩手は3千戸を木造でと室崎さんが。福島の県産材は放射能で引き取らない現状もある。10年は住める本設型。20年ぐらい住めるものを作ろうということらしいです。

いわき市の津波の被災状況、小名浜アクアパークなどの、写真をスライドで紹介。

室崎さん：工学院大学が石巻市で仮設とばしの本設住宅の建設を始めた。

- ・ 神戸復興塾 三谷真さん

釜石はあやふやな情報でいったら、「やっぺし かまいし」というイベントで力仕事をした。

萬画館の石ノ森章太郎は隣の登米市の出身。石巻市は中心市街地活性化法で基本計画を認定されて、漫画を生かしたまちづくりに取り組んでいた。撤退したさくら野百貨店を市が買い取って市役所にするなど面白い試みをしている。萬画館は何とか無事で、まちづくり会社街づくりまんぼうが、商業者を集めて活性化を考えている。商業自体は「震災なくても10年たったらあかんやろう」(市長)という現状。商業を続けたい人を集約して、萬画館の近くで石ノ森章太郎のキャラクターを打ち出した再生をしなければいけない。声が掛ければ、ワークショップをやりたい。

釜石は南側に小さいな漁港がいっぱいあってかなりやられている。が、ボランティアも入っていないところも多く、どうするかは地元でも頭が痛いところ。県外からボランティアはもっと大変。

釜石駅の青葉通りでイベントがあった。昨年9月に新しくしたばかりなのに、ぐちゃぐちゃになった。設計した東京の会社の松本建一さん(小林さんの後輩)が、ボランティアで入っていて、再生に向けイベントをやった。その手伝いをやらされ、シンガーの作人の歌やジャグリングもあって、子どもたちが喜んだ。作人の歌を聴いて泣いている被災者がいた。企画は東京や浜松発ですが、地元で手伝っている人もいた。松本さんは今後も張り付いてやりそう、お手伝いできればと思う。

「飲んべえ横丁」といういい飲み屋があつて、戦後の闇市のようなだったが、全部、壊滅。

青葉ビル1階の平屋のコミュニティーホールで復興ワークショップがあった。8人の地元、東北大の先生が参加。ワークショップというよりシンポジウムのように。辻さんと自分が同時に発言し、「神戸から復興応援してます」と言ってしまった。いらんおせっかいなんでしょうね。経験を伝えたいというときに、「神戸では…」という言い方はたぶん、しない方がよい。地元のNPOや支援団体に勉強しに来てもらって、じんわり共感してもらって、街、役所も動き出すかたちしかないんだろうな、という感じ。反省仕切りで返ってきた次第です。

## ◎その他

サバイバルネットワーク 松下哲雄さん

福島県の二本松市出身です。先月、陣中見舞い兼ねて帰郷しました。95年阪神に駆けつけたときには、被災者の皆さんがすぐに胸襟を開いてくれて、ボランティア活動がいろいろできました。

ところがこの度地元の二本松に帰って驚きました、みんながひっそりとしていてなかなか気持ちを開いてくれないのです。このような気質は東北では珍しくありません。昔から隠れキリシタン(?)が多い土地柄です、抑圧されていることに慣れているからかもしれません。一般的に原発の立地条件は、経済的に不活性で地質学的にも不毛な土地が多い、福島原発エリアも決して豊かな土地柄ではない。歴史的に福島県民は反骨精神がすごく旺盛なところ。反骨精神の強い人々に復興支援を呼びかけるにはテクニックが必要。神戸の経験は解決の糸口になるかなと思うが、神戸だ、神戸だ、と言っても、反発されるだけの終わりそう、向こうから「なにかしら良い知恵はないか!」と、いわれるまで待つことも必要かもしれません。

仮に、20年も住めないとするなら、集団でどこかに移住しなければならないだろう。たとえば被災地から地域ごと、神戸のあるエリアに引っ越してくる、と言った集団移住のようなプロジェクトは旨く行く可能性はある。個人的には、半径30<sup>km</sup>の土地には国が賃借料払い太陽光パネルを敷き詰めて電力を生産するなど有効利用ができないかと思う。また数万人という単位のビレッジを、磐梯朝日国立公園内に作り、空の彼方にふるさとの空が眺められることなどが村作りには必要ではないかと考える。神戸の人が被災して、強くなった貴重な経験をレバレッジにして、ぼちぼちやっていきたい。

現地では、温泉旅館に避難している人が防護服を着て朝早く原発に通う、夕方暗くなって帰り疲れ切った表情でご飯を食べている。隠れるような避難生活を余儀なくされている原発労働者がいる。自分が被害者でありながら、同時に加害者であると思込んでいる人々を、簡単には救えないだろうという思いもある。自分たちが原発で仕事して、家も作って家庭も持った人々には心のケアが必要とされているが、この先は長いと時が必要だろう。ただ、原子力被害者の問題だけを追及していくのが果たしていいのかどうか、解決への道は見えていない。願わくは、二度と同じ事故は起きてほしくないと思っています、福島原発事故は地震津波の自然災害と違い、人災だと言うことを肝に銘じなければならないと思う。

- ・ ギャラリー島田 島田誠さん

4月17日夜行バスで仙台に入って3日間、現地の被災地の状況をつぶさに見ると同時に、仙台のアート関係者とミーティングを始めました。息子が建築で被災地を回りながら、がれきの土を採取してました。建築的な提案をするみたいです。

アートエイド神戸を震災のときに、文化による復興の運動をやってきて、芸術文化における芸術支援策という論文をまとめていた。仙台メディアテークの副館長と連絡を取りながら、小論文の活動記録集を読んでもらった。現地では、14人ぐらいに集ってもらって説明。「アトリバイバルコネクション東北」の会合にも呼ばれ、宮城NPOセンターの紅邑さんのところにも行き、説明をしてきた。

一番、ずばりに簡単で効率のいい、文化を支えていく装置が「アート・エイド神戸」。少人数で最大の効率を上げることができると3日間説明してきた。2週間ぐらいたつていい反応があつて、ぜひやりたいと、「アーツ・エイド東北」をやりたいというキーパーソンが何人か集まった。東北の文化を再生するのは東北の皆さんだとなので、そういう旗をあげてくれたら、第1にはお金を送る。現地のニーズの応じてあらゆる応援はしますよ。今日、メディアテークの佐藤さんが文化財団が、小論文を参考にして、文化支援策を取りまとめていく方向に向かいつつあるという連絡があつた。NPO的なもので組織が立ち上がるころなのに、役割が違いますから、連携なしにやるとまずいから、とりあえず連絡を取ってくださいと伝えたところ。

小林さん:



「ライフサポート・アクティビティ」という活動がある。現地でドーム型のパオを被災者が組み建てる。トイレ、風呂にもなるし、シャワー、レストランになるそう。上岡科学工業の木口利男社長がとりあえず10基提供してくれるので、村井さん、や釜石にと、宮城の南三陸の工藤君のプロジェクトに1棟などを計画中。仮設の一面に置いているといい。ボランティアが寝泊まりするテントの隣に作るなど、いろいろ使い道があると思う。

・ 大阪大学社会人院生の石塚裕子さん  
神戸では石東さんと一緒にサポート隊の活動を行う予定。  
日本福祉のまちづくり学会の調査団として、4月12日から15日宮城県、4月30日～5月2日は岩手県、5月7、8日は 福島に行った。いわき市のビバリーヒルズと言われるニュータウンの中に、障害当事者による障害者等のヘルパー派遣業務などを行っているいわき自立生活センターにヒアリングを行った。

「自主避難区域に難病の障害者を置き、家族が逃げて、障害者がぼつんと残っていた」「排泄ができない障害者へのヘルパー派遣が滞って大変だった」という話を聞いた。

自立生活センターはちょうど、建物中だった。その敷地の周辺に400棟の仮設住宅が建設される予定で、既に150棟ぐらいが建っていた。400棟完成すれば、いわき自立生活センターが中央に位置することになる。障害者等のサポートセンターとしての機能だけではなく、避難者の交流の場であったり、いざ再災害となった時に1週間程度は自立した避難生活ができるよう備蓄を用意することを考えたいと、理事長が言っていた。センターの建設が遅れそうなので、パオの建物がいただけたら、喜ばれるのではないかと思う。

理事長によると、リアルに避難する訓練をやっていなかった反省があったそうで、放射線量に独自の一定の基準を設けて、行政の避難勧告を待たずとも、スタッフの家族も含めて施設丸ごと避難することを想定した防災訓練を5月末にも実施するそうです。

★いわき市の自立生活センターに、石塚さんを通して「パオの建物」を提供するように段取り中です。